

## 「レビの家」

マルコの福音書 2:15～17

### はじめに

イエシュアは、ガリラヤ湖のほとりの収税所に座っていたアルパヨの子レビという名のひとりの取税人に目を留められ、「わたしについて来なさい」と声をかけられました。するとレビはすぐさま立ち上がり、イエシュアに従っていったのでした。

### 1. 食卓に着く

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:15 それからイエスは、レビの家で食卓に着かれた。取税人たちや罪人たちも大勢、イエスや弟子たちとともに食卓に着いていた。大勢の人々がいて、イエスに従っていたのである。

イエシュアの弟子となった取税人レビは、イエシュアを自宅に迎えます。そしてそこにはイエシュアとその弟子たちとともに、大勢の取税人たちや罪人たちが「食卓に着いていた」ことが記されています。しかしここで「食卓に着いていた」という箇所に使われているヘブル語は、サーヴァヴ(סֵרְבַּב)という動詞で、本来は川が大地を巡り、流れることを指し示す言葉です。

【新改訳 2017】

創世記

2:10 一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。

2:11 第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れていた。そこには金があった。

2:12 その地の金は良質で、そこにはベドラハとシヨハム石もあった。

エデンの園から湧き出た「一つの川」、それが「巡って流れていた」と訳されている箇所に聖書で最初のサーヴァヴがあります。エデンからサーヴァヴ「巡って流れていた」ピションという名の川によって、その地は良質の金と宝石に恵まれていました。金や宝石は人にとっていつの時代にあっても豊かさや繁栄の象徴です。また価値あるもの、人が求める魅力的なものの象徴でもあります。それらのものが川が巡り流れることでもたらされることが、「食卓に着いていた」と訳されたサーヴァヴ本来の指し示す意味であると考えられます。「イエスは…家で食卓に着かれた」という、日本語では何の変哲もないただの情景描写も、ヘブル語の持つその本来の意味で解釈するならば、神の「家」である天の御国、神の国において、イエシュアとは人に豊かさや繁栄、人が求める魅力的なものをお与えになる存在であることが表されていると考えられます。まさしく以下のように記されている通りです。

【新改訳 2017】

マタイの福音書

6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

「これらのもの」とは、人が生きていく中で必要とするもの、また求めるすべてのものを指しています。イエシュアはレビの「家」を用いて、神の国とはどのようなものであるかを表されたと考えられます。

## 2. 取税人と罪人

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと一緒に食事をしているのを見て、弟子たちに言った。「なぜ、あの人は取税人や罪人たちと一緒に食事をするのですか。」

イエシュアと弟子たちが招かれたこの家には、他に大勢の「取税人や罪人」がいました。彼らの存在は一体何を指し示しているのでしょうか。まず「取税人」のことをヘブル語でモーフシーム(מוֹדֵסִים)と言いますが、「税、貢ぎ」を意味するメヘス(מֶחֶס)という名詞が語源で、モーフシームは直訳すると「税の人、貢ぎの人」となるわけですが、このメヘスは旧約聖書では民数記 31 章でしか使われていない非常に珍しい名詞です。この箇所はモーセがイスラエルの指導者であった時の最後の戦いについて記したもので、モーセがイスラエルの各部族から 1000 人ずつを徴兵し、計 12000 人の兵でミディアン人と戦わせるというものです。イスラエルは見事この戦いに勝利し、ミディアン人から衣服や貴金属、家畜や奴隷など非常に多くの戦利品を獲ます。モーセはその中から汚れた物や偶像礼拝に関するものを取り除き、イスラエルの祭司エルアザルはこの戦利品の総数を調べ、その中から神が定められた数の分だけを徴収し、これを神へのメヘス、つまり「貢ぎ、奉納物」としました。このように「税」と訳されたヘブル語のメヘスには本来、戦いの勝利、罪や汚れの排斥、そして神へのささげもの、すなわち神のもの、神の所有というような意味が指し示されていると考えられ、このような意味合いでモーフシームを捉えるならばこの「取税人」とは聖なる者たち、神の所有の民であるイスラエルの民、ユダヤ人を指し示していると考えられます。ちなみにイエシュアとともに食卓に着いた「弟子たち」についてですが、彼らについてイエシュアはこう明言しておられます。

【新改訳 2017】

マタイの福音書

19:27 そのとき、ペテロはイエスに言った。「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。それで、私たちは何をいただけるのでしょうか。」

19:28 そこでイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。

このように「弟子たち」はイスラエル、ユダヤ人の 12 部族の族長、指導者となることが語られています。

そして「罪人」の存在について。これをヘブル語でハッターイーム(חַטָּיִים)と言い、「罪を犯す」と言う意味の動詞ハーター(חָטָא)がその語源です。この最初の言及は創世記 20:6 です。

#### 【新改訳 2017】

##### 創世記

20:6 神は夢の中で彼に仰せられた。「そのとおりだ。あなたが全き心でこのことをしたのを、わたし自身もよく知っている。それでわたしも、あなたがわたしの前に罪ある者とならないようにした。だからわたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかったのだ。

この箇所はイスラエルの父祖であるアブラハムが、ゲラルという地を訪れた時、彼は自分の妻であったサラを妹だと偽ったために起こってしまう事件について記されたものです。ゲラルの王アビメレクはアブラハムの妹だというサラを召し入れ、自分の妻にしようとしています。しかしここで神がアビメレクの夢に現れ、真実を明かします。神は彼を「罪ある者とならないようにした」とあります。ここに聖書で最初のハーターが使われています。アビメレクはアブラハムの血縁ではありませんので神の目から見れば異邦人です。ですからこのハーターには本来、神が「罪ある者とならないようにした」異邦人を指し示していると考えられます。

このようにレビの「家」でイエシュアとともに食卓に着いた「取税人や罪人」とは、神の所有の民であるイスラエル、ユダヤ人と、罪を赦された異邦人を指し示していると考えられます。神の御子メシアであるイエシュアとイスラエル、そして異邦人、この三つの存在によって構成されるのがメシア王国、千年王国とも呼ばれる神の国です。またここで「食事をする」と訳されているヘブル語はアーハル(אָחַל)と言い、本来は創世記 2:16 で人がエデンの園にある木の実を思いのまま食べることを指し示す言葉です。ですからこのレビの「家」に表された神の家、神の国とはエデンの園の回復でもあると考えられます。このような一見何の変哲もない情景描写のような記述の中にも神はそこにご計画を「型」として表しておられ、神がいかにその成就、完成を願い、見つめておられるかということをつかぎ知ることができます。

### 3. 癒す

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:17 これを聞いて、イエスは彼らにこう言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」

イエシュアは短いたとえを用いて語られました。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。」これをヘブル語で直訳すると「丈夫な人は癒す必要がない」となり、「癒す、治療する」という意味の動詞ラーファー(אָפֵק)が使われています。この言葉の持つその本来の意味は、アブラハムの祈りによって、神が異邦人のアビメレクの妻や奴隷たちを癒された出来事を指し示しています。

【新改訳 2017】

創世記

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

20:18 【主】が、アブラハムの妻サラのことで、アビメレクの家すべての胎を堅く閉じておられたのである。

この箇所もアブラハムとゲラルの王アビメレクとの間に起こった出来事です。アブラハムが自分の妻であるサラを妹だと偽ったために、アビメレクはサラを自分の妻に迎えようとしていました。神はアブラハムとサラから生まれる子孫を神の民、イスラエルとして選んでおられましたので、アブラハムからサラを引き離すこの出来事をお許しにならず、アビメレクの家から子が産まれないようにして、彼の家に対して怒りを表されました。しかしアビメレクが自分の過ちに気づき、アブラハムの妻サラを夫のもとに帰した時、アブラハムの祈りによってそれが「癒やされた」という箇所に、聖書で最初のラーファーが使われています。このようにラーファーとは本来、イスラエルの父祖アブラハムによって、異邦人に子孫がもたらされるという意味があると考えられ、神がアブラハムとその子孫すなわちイスラエルに約束された以下の御言葉に結びついてきます。

【新改訳 2017】

創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

神は子が生まれなくなったアビメレクの家を直接癒すこともおできになりました。しかし神はこの約束のゆえにアブラハムの祈りによってラーファー・癒され、アブラハムによって、「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」ことをお示しになりました。このように、癒す・ラーファーには本来、アブラハムとその子孫すなわちイスラエルの民、ユダヤ人によって異邦人、すなわち世界のすべての人々が祝福されるという神の国、御国の形が指し示されていると考えられ、イエシュアはそのために、それを成就、完成するために「わたしが来た」と言っておられるのだと考えられます。このように、やがてこの地上に建てられる神の国、御国はイスラエルの民、ユダヤ人によって世界のすべての人々が祝福されるという形を持った世界です。ですからイエシュアはユダヤ人としてお生まれになり、ユダヤ人の王として十字架にかかれ、やがて再びイスラエルに帰って来られることが聖書に記されているのです。

自分の幸せ、成功、祝福のために聖書を読み、その御言葉を用いる人は多くいます。しかし聖書は本来、そのような目的のために書かれた書物ではありません。聖書は神のご計画が記された、神の思い、願い、その御心が記された書物です。ですから神が何に目を留め、誰を選び、そして何をしようとしておられるのかという視点で聖書を学ぶことは重要です。その上でイスラエル、ユダヤ人の存在、そして何より彼らの言語であるヘブル語に対する理解は、聖書を理解するための最も重要な要素であると考えます。